【論文】

子育てを楽しむための地域子育て支援の学びと省察

新川　泰弘 *

Learning and Reflection on “Community-based Parenting Support” for “Enjoying Parenting”

Yasuhiro Niikawa

要　旨

本研究の目的は、子育てを楽しむための地域子育て支援について討議した講義の学習成果を明らかにすることであった。子ども家庭福祉実践者と学生に対する講義の中で、地域子育て支援に関する法・システム、地域子育て支援拠点事業、親と子のふれあい講座について説明し、学生の講義には子ども家庭福祉実践者による学習成果を加えた。その後、子ども家庭福祉実践者と学生の学習成果を比較、検討した。自由記述による提出レポートを分析した結果、学生の学びは講義内容にとどまっていたが、子ども家庭福祉実践者の学びには講義内容に加えて、孤立化防止の声かけといった地域子育て支援の省察に関する学び合いの成果も含まれていることが明らかになった。

Abstract

This study aims to analyze the learning outcomes with regard to “community-based parenting support” for “enjoying parenting.” The community-based parenting support system’s organization and rules, community-based parenting-support projects, and “Oyatokonofureaikouza” were explained in a course conducted for child and family services practitioners and students. The child and family services practitioners’ learning outcomes were introduced in the students’ course. The learning outcomes of the practitioners and students were compared and examined. I analyzed the reported answers of the open questions. As a result, the analysis showed that students reported that they gained knowledge through the course. However, practitioners reported that they gained not only knowledge but they also learned reflective practices for community-based parenting support.

● ● ○ **Key words**　子育てを楽しむ Enjoying Parenting ／ 地域子育て支援 Community-based Parenting Support ／ 子ども家庭福祉実践者 Child and Family Service Practitioner ／ 学びと省察 Learning and Reflection ／ 実践と経験 Practice and Experience

受付日　2011.9.14 ／ 受理日　2011.10.26

* 関西福祉科学大学　社会福祉学部　准教授

注）本研究は文部科学省科学研究費（若手研究 B）「地域子育て支援センターにおけるファミリーソーシャルワーク実践モデルの開発的研究」（課題番号 20730394）（2008～2010）による研究成果の一部である。

Ⅰ．問題及び目的

近年、親の子育て力の低下や子育て家庭の孤立などの課題がクローズアップされている。そして、地域の子育て家庭への保育所の支援が児童福祉法48の3に明記された。また、保育所保育指針に第6章「保護者に対する支援」が設けられた。その中で、保育所や保育士は子どもの保育と保護者支援の役割を担うことが記された。さらに、地域の子育て家庭に対する支援を行うことも示された。そこで、保育所機能を開放し、子育て家庭に対して、子どもの育ちや子育て上の問題に関する相談援助が求められるようになった。また、子育て家庭の交流の場を用意し、地域における子育て情報の提供もなされるようになった。そして、地域子育て支援における保護者のペアレンティングの支援、社会全体の子育てパートナーシップを推進する基本的理念が保育所保育指針に示されていると網野（2011）により指摘されている。

子どもたちの健やかな育ちや自立を促し、さらには親自身の育ちを支援することで、子育て・親育て支援社会をつくることが、国の最優先課題として少子化社会対策大綱の目的に明記された。少子化社会対策大綱の少子化の流れを変えるための重点課題のなかに「子育ての新たな支え合いと連帯」が掲げられた。また、すべての子育て家庭が利用できる身近な場所に地域子育て支援拠点を作り、子育ちの段階に応じた「親と子の育ちの場」の提供を進め、親の成長と子育てを支援していくことが示された。親と子の育ちに関して、Gerald R. Patterson（1982）は、「家族とは子どもとすべての家族員にとって、互いに援助し合う中で成長し、自己実現するために必要なもっとも身近で安定した環境（育む環境）である」と述べている。その上で、互いが互いの良さを認め、育て合う関係（相互強化的関係）が求められると論じている。

なお、内閣府（2011）による「子ども・子育て新システム」の「子ども子育て家庭を応援する社会の実現に向けての制度構築に向けた基本的考え方」においても、子育ての充実感を得られるなど「親としての成長」を支援する」ことが掲げられた。「親の成長」を支援する実践のプログラムとしては「親と子の育ちの場」を提供するため、1987年からすでに芝野（2002）によって「親と子のふれあい講座」が研究開発され、神戸市で継続的に実践されている。

近年の子どもと家庭を取り巻く社会及び家庭環境の変化を受けて、保育士養成の教育内容に関する調査研究がなされている。大嶋（2009）は、保育士養成校及び社会福祉施設を対象として保育士養成の教育内容について今後さらに充実が必要な科目を調査している。その結果、「家族援助論」が最も必要とされ、「発達心理学」「障害児保育」が続いていることがわかった。また、保育士養成校におけるヒアリング調査を通して「ソーシャルワーク（相談援助）」、「保護者支援に関する科目」などの充実を求めていることも明らかにされた。

なお、児童福祉法や子ども・子育て新システムの基本的な考え方に基づいて子育て家庭を支援し、子育ちと子育てを支援する社会を形成していくためには、「親と子の育ちの場となる地域子育て支援拠点」の整備を推進する必要がある。その中で、親と子の成長・発達と子育てを支援していく体制が求められる。そのため、地域子育て支援拠点における子育て家庭への専門的な支援を行う子ども家庭福祉実践者の養成が喫緊の課題となる。

「親としての成長」を支援するための地域子育て支援拠点における子育ち子育て支援が必要であることから、本研究では、保育士養成校の学生を対象として保育士など子ども家庭福祉実践者の実践知（knowing-in-practice）を導入した子育てを楽しむための地域子育て支援について、語り合い、学び合う教育を行った。

なお、内閣府（2009）により、量的整備とあわせて、質的にも共に支え合い、学び合う地域子育て支援活動の原点にねざした活動を広げていくことが重要な課題であることが指摘されている。また、佐藤（1996）はJohn Dewey（1938）のいう「経験」は学習経験を意味し、科学者の実践する学問的経験との間の「探究」における連続性を表現していると指摘している。そして、探究の中心はDewey（1910）の「反省的思考（reflective thinking）」であると論じている。このDeweyの示した「反省的思考」に基づいて、Donald A. Schön（1984）は、学びの方法として行為の中の省察（reflection in action）を行う意義について述べている。そして、行為の中の省察により反省的実践（reflective practice）を行い、省察を通して高度な専門性を獲得していく新たな反省的実践者（reflective practitioner）モデルが提示された。

そこで、本研究における学びと省察は、Deweyの反省的思考に基づいたSchönの反省的実践者像の考え方に沿って進めた。そのため、子ども家庭福祉実践者による実践の省察は、子育てを楽しむための地域子育て支援に関する講義を学んだ後に、日々の実践を省察することの重要性を伝え、互いの実践知を討論する学び合いの場を用意した。その際、子育ての新たな支え合いと連帯を実現するため、子育ての充実感を得られると思われる「親としての成長」を支援することの意義について説明した。そして、互いの経験談を聴き合い、語り合うことで、具体的な実践事例について考えるグループ討論を子ども家庭福祉実践者主体で行った。その後、保育士養成校の講義で、地域子育て支援に関する法・システム、実践理論と実践事例、子ども家庭福祉実践者の実践の省察を通して得た具体的実践内容・方法を学生が学び、その成果を明らかにすることを本研究の目的とした。

Ⅱ．研究方法

1. 対象

保育士養成校において保育士資格を取得希望する1・2年生（n=161）。

2. 学習内容

家族援助論において地域子育て支援拠点とファミリーソーシャルワークについて理解を深める学習を行った。その際、日々休むことなく繰り返される子育ての中で、親が少しでも子育ての楽しさや喜びを実感できるような支援について考えていくために、「子育てを楽しむための具体的な支援」についてグループ討議を行った。グループ討議を開始する前に、地域子育て支援に関する法・システム、地域子育て支援拠点事業における基本事業（表1）の説明を行った。また、子育てをもっと楽しむことをスローガンに掲げたグループペアレントトレーニング実践モデルである親と子のふれあい講座（芝野,2002）における「子育てを楽しむための5つの条件（表2）」及び「具体的な子どもへの関わり方（表3）」について説明した。さらに、保育士などの子ども家庭福祉実践者が、子育てを楽しむための具体的な支援について日々の実践を省察するとともに、グループ間で協議し、学びあった学習成果（表4）を取りまとめたものを示した。なお、子ども家庭福祉実践者とは、明確な家族援助における問題意識と学習意欲を持ち、地域社会の福祉に貢献するために再チャレンジを志している保育士など子ども家庭福祉実践者として現場復帰したい休職中の有資格者や保育現場でキャリアアップを目指している現職社会人である。実践経験年数の内訳は、30年以上4名、20年以上30年未満4名、10年以上20年未満10名、1年以上10年未満7名、経験年数0は2名であった。

3. 学習成果分析の手続き

地域子育て支援拠点で行われている子育てを楽しむための地域子育て支援について、学生間のグループ討議を経てまとめた自由記述レポートを提出するように求めた。自由記述レポート分析のコーディングにはPASW Text Analysis for Surveys3.0を使用し、主成分分析及びクラスター分析にはPASW statistics 17.0を用いた。なお、コーディング及びクラスターの命名においては社会福祉及び心理の3名の専門職による協議を行った。

表1　地域子育て支援拠点事業における基本事業

1. 子育て親子の交流の場の提供と交流の促進
2. 子育て等に関する相談、援助の実施
3. 地域の子育て関連情報の提供
4. 子育て及び子育て支援に関する講習等の実施

表2　「子育てを楽しむための5つの条件」

1. 子育てを楽しもうと思うこと
2. 自分の子どもについての成長・発達の知識を持つこと
3. 子どもとの接し方の技術をもつこと
4. 孤立しないこと
5. 息抜きをすること

表3　具体的な子どもへの関わり方

1. コンサルタントの役割；上手なほめ方、励まし方
2. リミットセッターの役割；上手な叱り方
3. アーキテクトの役割；危険を防止し、子どものよさを伸ばす環境作り

表4　子ども家庭福祉実践者教育の学習成果
1. 孤立化防止の声かけ
2. ニーズに応じた支援と長所や利点などアセットへのアプローチ
3. 身体的関わりによる子育ちへの気づきを促す支援
4. 親子で楽しく遊ぶことで子育ちや親育ちを促していく支援
5. 参加型のふれあい体験

Ⅲ．結果及び考察

学生の学びの概要を把握するために類似の語句をコーディングした。また、構成要素428に対して、同種の語を置換し、閾値2以上の構成要素を特定したところ52となった。なお、構成要素の出現頻度は、子ども：89名（55.3％）、楽しむ：42名（26.1％）、一緒：41名（25.5％）、親：38名（23.6％）、遊び：29名（18.0％）、子育て：29名（18.0％）、発達・成長：26名（16.1％）、自分：24名（14.9％）、交流：17名（10.6％）、親族・友人：14名（8.7％）、場：13名（8.1％）、ない：10名（6.2％）、話：10名（6.2％）、良い：10名（6.2％）であった。この結果から、親と子どもと一緒に楽しむ、親と子どもと遊ぶ、親族友人と交流するといった支援について話し合われていたことが推察された。

次に、構成要素どうしの関連を解析するため、主成分分析で算出した成分負荷行列を利用してクラスター分析（抽出法にウォード法、測定方法に平方ユークリッド距離による）を行った。分析結果はデンドログラムで表し（図1）、クラスターとして解釈できそうな距離を20と判断して解釈した結果、3グループを抽出した（表4）。

学生と子ども家庭福祉実践者との学びの比較、検討を行ったところ、学生は、「周りで子育てをしている人と遊んだり、交流したりすることによって、わが子が成長・発達する姿を発見し、子育てを苦労だと感じ

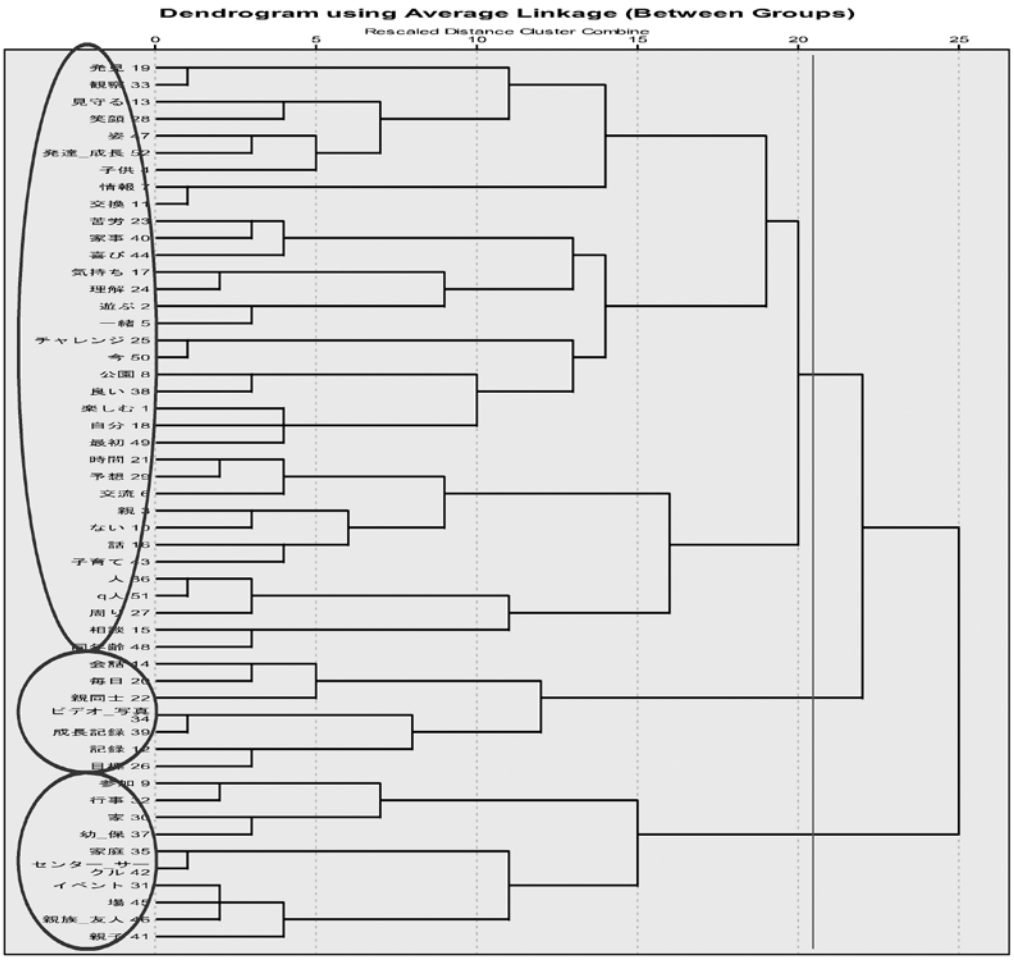

図1　子育てを楽しむための具体的な支援のデンドログラム

てきた思いを喜びや楽しみへと変えていく支援」、「子どもの成長記録について親同士での会話を促す支援」、「子育て支援センターのサークル、幼稚園や保育所のイベント・行事へ親子で参加するように働きかける支援」を挙げていた。一方で、子ども家庭福祉実践者は、「孤立化防止の声かけ」、「ニーズに応じた支援と長所や利点などアセットへのアプローチ」、「身体的関わりによる子育ちへの気づきを促す支援」、「親子で楽しく遊ぶことで子育ちや親育ちを促していく支援」、「参加型のふれあい体験」を挙げていた。

表4　子育てを楽しむための具体的な支援についてのクラスター

1. 周りで子育てをしている人と遊んだり、交流したりすることによって、わが子が成長・発達する姿を発見し、子育てを苦労だと感じてきた思いを喜びや楽しみへと変えていく支援
2. 子どもの成長記録について親同士での会話を促す支援
3. 子育て支援センターのサークル、幼稚園や保育所のイベント・行事へ親子で参加するように働きかける支援

講義内容との関連からみていくと、学生のクラスター名の中に「子育て仲間との交流」、「子育てサークル」、「イベント参加」があり、「地域子育て支援拠点事業における基本事業」に示されている「子育て親子の交流の場の提供と交流の促進」と関連する支援について学んでいたことがわかった。

また、Patterson（1982）の指摘する親と子の育て合う関係（相互強化的関係）の視点から子どもの成長・発達を育む支援を考えると、親の成長・発達を育む支援と別々に行われるものではないといえる。なお、グループ討論前の講義の中で、親子を一体的に捉えた上で、子育ちと親育ちを育む支援を行う意義について説明した。また、親の育ちを育む支援の過程において親が子どもの成長、発達に大きな影響を及ぼしていることについても解説したため、関連する「子どもの成長・発達に着目した支援」が学生のクラスター名から得られたものと推察された。

さらに、網野（2011）により指摘されている社会全体の子育てパートナーシップの理念に基づいて、日々休むことなく繰り返される子育ての中で、親が少しでも子育ての楽しさや喜びを実感できるように、子ども家庭福祉実践者が親を支援していくことの重要性を講義において取り上げた。また、「子ども・子育て新システム」の「子ども子育て家庭を応援する社会の実現に向けての制度構築に向けた基本的考え方」において示された子育ての充実感を得られる「親としての成長」を支援することの意義についても説明した。そして、学生のクラスター名から「子育てを苦労だと感じてきた思いを喜びや楽しみへと変えていく支援」が得られ、講義による学びの成果がうかがえた。加えて、実践者が親とパートナーシップを形成して子どもの成長・発達を育む地域子育て支援の実践事例として、子どもの成長を記録する実践や親同士で語り合う機会を設定する実践を講義のなかで紹介した。そして、そのことと関連した「子どもの成長記録について親同士での会話を促す支援」という学生のクラスター名が得られた。

一方、子ども家庭福祉実践者のクラスター名には「親子で楽しく遊ぶことで子育ちや親育ちを促していく支援」があり、「地域子育て支援拠点事業における基本事業」に示されている「子育て親子の交流の場の提供と交流の促進」との関連がうかがわれた。さらに、「ニーズに応じた支援と長所や利点などアセットへのアプローチ」のクラスター名から、親と子のふれあい講座における「具体的な子どもへの関わり方」についての学習成果が確認された。

なお、講義の中では、子育て家庭の孤立化を予防、防止していく意味において地域子育て支援が重要であることを解説したものの、子ども家庭福祉実践者の学びの成果である「孤立化防止の声かけ」についての具体的な内容については示さなかった。しかし、子ども家庭福祉実践者のグループ討議の中で、親への子育て講演会・イベントの情報提供、子育ての仲間づくり、子育て家庭への訪問支援といった場面で行われている「孤立化防止の声かけ」に関する語り合いと学び合いが行われていた。

Ⅳ．結論と展望

本研究により、学生の学びは講義内容にとどまっていたが、子ども家庭福祉実践者の学びには講義内容だけでなく、地域子育て支援の省察に関する学び合いも含まれていたことが明らかになった。

Dewey によって明らかにされた学習経験と科学者

の実践する学問的経験との間の「探究」の中心にある「反省的思考」の重要性を佐藤（1996）は指摘している。そこで、本研究では、実践知を探究していくための反省的思考に基づいた反省的実践が大切であることについて説明した。

結果として、学生が子どもと子育て家庭を支援する経験を省察し、その成果を示すことはなかった。一方、子ども家庭福祉実践者は、講義で取り上げていない実践の中で行っていた「孤立化防止の声かけ」といった地域子育て支援に関する実践の省察を通した学び合いを行っていた。

全国保育士養成協議会専門委員会（2011）が全国の保育士養成校の教員を対象として「保護者や家族へのかかわり方や支援力の習得」に関する調査を行っている。その結果、保育士養成校の段階で「保護者や家族へのかかわり方や支援力を習得してほしい」と考えている割合は7.7％、保育士養成校を卒業した後の段階で「保護者や家族へのかかわり方や支援力を習得してほしい」と考えている割合は62.4％であることが報告された。それゆえに、保育士養成校を卒業した後の子どもと子育て家庭への支援に関する教育・研修の充実は急務であると思われる。

また、佐藤（1996）はDeweyのいう学習の意味には共同体（community）の特徴があることを指摘している。本研究における講義では、Deweyの示した共同体の理念について取り上げて説明した。その上で、講義の後に、学習者自身の経験や実践を省察し、講義で学んだことを踏まえて、「子育てを楽しむための具体的な支援」についてグループ討議を通して学び合い、語り合う場を用意した。

なお、学生の実習後の学びの省察については、保育士養成の段階から取り組まれており、全国保育士養成協議会専門委員会（2006）は、新たな専門職像の視点から実践後の省察を通して学びを深めていくことの重要性を指摘している。さらに、実践者の省察について、Schön（1984）は、実践前の省察、行為の中の省察、実践後の省察を通して実践を省察していくことの意義を論じている。そのため、今後は地域子育て支援拠点における実習中に行われる行為の中の省察、実習後の省察を通して、実践現場の子育ち子育て支援課題についても学び合いを深めていきたい。そして、日々の実践を省察しながら語り合う教育環境及び教育プログラムをデザインし、学び合う子ども家庭福祉実践者の共同体を創り出していきたい。

文献

1. 網野武博：保育相談支援の意義と心理学的課題，福祉心理学研究，8（1），1-5,2011.
2. Schön, D.A.：The Reflective Practitioner: How Professionals Think In Action, Basic Books, 1984.（佐藤学・秋田喜代美訳：専門家の知恵 - 反省的実践家は行為しながら考える -，ゆみる出版.）
3. 保育所保育指針（平成20年3月28日，厚労告141），2009.
4. Dewey, J.：Experience and Education, The 60th Anniversary Edition. West Lafayette, Kappa Delta Pi, 1938.
5. Dewey, J.：How We Think,D.C.HEATH&Co,1910.
6. 内閣府：子ども・子育て新システムに関する中間とりまとめの概要，2011.
7. 内閣府：少子化社会対策大綱（平成16年6月4日閣議決定）.
8. 内閣府：少子化社会白書，135-137,2009.
9. 大嶋恭二：全国保育士養成協議会第48回研究大会特別研究発表「保育サービスの質に関する調査研究」，厚生労働省科学研究費補助金政策科学推進研究事業保育サービスの質に関する調査研究 平成18～20年度総合研究報告書，2009.
10. Patterson, G.R.：A Social Learning Approach Volume 3 Coercive Family Process. NY: Castalia Publishing Co, 1982.
11. 佐藤学：第2章学びの対話的実践へ，（佐伯胖・佐藤学・藤田英典：シリーズ学びと文化1.学びへの誘い），東京大学出版会，49-91,1995.
12. 芝野松次郎：社会福祉実践モデル開発の理論と実際―プロセティックアプローチに基づく実践モデルのデザイン・アンド・デベロプメント―，有斐閣，2002.
13. 全国保育士養成協議会専門委員会：保育士養成システムのパラダイム転換―新たな専門職像の視点から―，保育士養成資料集，44，社団法人全国保育士養成協議会，2006.
14. 全国保育士養成協議会専門委員会：指定保育士養成施設教員の実態に関する調査報告書Ⅰ―調査結果の概要―，保育士養成資料集，54，社団法人全国保育士養成協議会，166,2011.